

コメント

国際連合大学 上席学術顧問・東京大学 名誉教授
世界水会議 前理事 高橋 裕

日本人は水への感覚が鋭かった

水に関する様々な意見、あるいは学問的解釈は世に満ち満ちていますが、ただいまコルバンさんに伺ったような観点での、水についての講演は、滅多に触れることはできません。大変参考になりました。しかし、率直に言って難解でもあり、ここは日本ですので、「日本人として」コルバンさんのお話をどう受け止めたらよいのか、私の主観で感想を述べます。

最後にコルバンさんが、「水というのは、管理と科学的分析の対象であると同時に、様々な夢想と幻想と信仰を支えている」とおっしゃいましたが、産業革命以来、あるいは日本では明治維新以来、西洋から学んだ科学技術により、それに基づいて我々は水の技術を発展させ、それに応じた水の行政体制や管理体制が整えられてきました。それは、相当の短期間の間に成功を収めたと思いますが、別な側面、つまり今日のテーマにありますように、「水の感性」ということを我々は軽視、あるいは無視したのではないかとつくづく感じます。

ところで、私がかねがね思っているのですが、日本人というのは、元来は水への感覚が大変鋭かった民族であったと思っております。ところが、明治以降の急速の近代化、第二次大戦後の高度経済成長に伴って、日本人が元来持っていた感性は相当失われ、水への情緒も軽視されてきたのではないかと。それが今、コルバンさんのお話を承っての率直な意見です。

そして、20世紀の終わりから21世紀の初頭に入り、世の中の価値観が鋭く変化していますし、社会が大きな曲がり角、転換期を迎えている時に、日本人の古来持っていた優れた水への深い感性を取り戻したいものだと思います。

日本人は、いかに水への感覚が鋭かったか。例えば、日本特有の文学である俳句や和歌は、水、あるいは川というものを無視しては、ほとんど成り立たないのではないかと、あるいは、水に関する表現用語が、日本語ほど豊かな言語はないということは、金田一春彦さんをはじめ、多くの言語学者が指摘しているところです。

例えば、私が感銘を受けた俳句をいくつかご紹介致しますと、蕪村の「春風や堤長うして家遠し」という句があります。これから蕪村と芭蕉の俳句を若干ご紹介しますが、芭蕉は1644年から1694年、蕪村は1716年から1783年に生きた人ですが、この頃のヨーロッパはどういう時代であったかと言いますと、1774年にフランスではルイ16世が即位しています。やがて、フランス革命が起こるのは1789年です。あるいは、1780年にマリア・テレジアが没しています。つまり、そういう時代に蕪村や芭蕉が活躍したのです。

先ほどの蕪村の句は、堤防というものへの限りなき郷愁を述べています。この句碑が、淀川の毛馬の近くの堤防の上にあります。あの近くで蕪村は生まれました。蕪村は、子供の頃淀川の堤防で遊び、それが年をとっても良い思い出になっていたに違いありません。そして、春風に吹かれながら、今の淀川の堤防とは違いますが、当時の淀川も日本では治水工事が進んでいた方なので、長い堤防を歩きながら、「なかなか家が遠いな」など、それは、彼が年老いても大変懐かしい思い出だったよ

うです。そうすると、堤防というのは、住んでいる人たち、そこに遊びに来る人たちに、郷愁を起こさせるものであって欲しいわけです。堤防は、洪水を守るためにあるのではなく、言わば庶民文化を培っている。もちろん、河川技術者は堤防を作る時に洪水のことばかり考えて、どのくらいの高さにすればいいかということは基本ですが、その堤防が周辺の人から愛されるような、年をとってからもそこを歩くことが懐かしいような堤防でなければならないと思います。蕪村のこの句は、河川技術者側から見ると、堤防は文化だと教えている句だと思います。

水と音・声・匂い・季節

芭蕉にも川や水を謳った多くの名句があります。これは日本人なら誰でも知っている俳句で、芭蕉の俳句を1つ言えといったら、たぶんこの句になるでしょうか。1686年に詠まれた、「古池や 蛙飛び込む水の音」です。ここで大事なことは、“音”です。その音を、芭蕉はこのような形で表現しました。

また、『奥の細道』の中にたくさんの俳句があります。その中に、立石寺に行った時の「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」という句があります。これは“声”が大切です。「蝉が鳴いていたら静かではないではないか」というのは屁理屈です。これは、蝉の声がちょうど岩の中に入っていきように聞こえるほど、周辺は静かであったという意味です。これらの句を翻訳すると、「古池や・・・」は「OH！ SILENCE」で始まります。また、「閑かさや・・・」も同じです。コルバンさんは、音についての著作をたくさんお書きでいらっしゃいますので、この日本の俳句の中に込められている日本人の音に対する感覚について、後ほど感想を承れば幸いです。

とにかく、この蝉の“声”が大事であり、古池に飛び込んだ水の“音”が大事です。それが、圧倒的にこの俳句の命だと思いますが、なかなか外国の方にはわかってもらえないようです。「古池や 蛙飛び込む 水の音」を直訳すると、外国の方から「では、それからどうしたのか」というご質問を受けますが、ここにある“音”や“声”という日本人の耳の感覚がわからないと難しいかもしれません。

同じ 1689 年、最上川を芭蕉が旅した時の「五月雨をあつめて早し最上川」という句を、そしてさらに河口に行き、「暑き日を海にいれたり最上川」という句があります。この最上川の 2 つの句は、普段は流量が少なく、五月雨の時に流量が増えるその豪快さ、濁流と量感を見事に表し、そして、「暑き日を・・・」は、ちょうど河口で夕日が来たので、最上川そのものを海の中へ流し込んでしまう雄大さを表しています。日本海と最上川の構図の中で、川と海と夕日をどう感じ取るかを、見事に表した俳句であろうと思います。日本人が水や川をどう眺めるかという感覚が現れていると思います。その河口には、酒田の港を切り開いた河村瑞賢の銅像が建っています。

また、私は中学時代、国語の授業で教わった中に、「追風用意」という大変感銘した言葉があります。これは、人間が通った後にいい香りを周辺に漂わせるために、かつての女性は外出する時には、衣服に香を抱き込み、追い風を利用して、向き合う人に良い香りを与えようとしたわけです。

「追風用意」は徒然草などいろいろなところに出てきますが、これは日本人の匂いの感覚を示す見事な用語だと思います。コルバンさんは、匂いの歴史をお書きで、私も読ませていただきましたが、パリの悪臭のことがたくさん出てきました。私は大変驚きと印象に残っていますが、日本人は匂いというものに関しても、決して無神経ではなかったところか、かつての女性は香を衣服に含ませて外出

することが女性のたしなみでした。これを私に教えてくれた国語の先生は、日本人の匂いの感覚というものを絶賛されました。

俳句や和歌、特に俳句は春夏秋冬がなければ成り立ちません。しかし、幸いなことに日本の春夏秋冬、新年など、季節の間の水はまるで違います。微妙に変わる水や川の様相に、古来日本人は鍛えられました。そして、水の微妙な変化に季節を知り、水との付き合い方を錬磨されたのだと思います。少しでも先の季節の匂いを嗅ごうというのは、「一葉落ちて天下の秋を知る」だけではなく、「水ぬるむ」というのも日本的表現です。しかし、物理的解釈が日本の水の管理を支配するようになったのは、明治以後の日本の近代化です。

冒頭で申し上げましたように、日本ほど春夏秋冬がはっきりしている国はありません。温帯ならどこでも春夏秋冬があるわけではないのです。ヨーロッパなどは夏が終われば、すぐに冬です。つまり、日本の秋などはまことに恵まれた四季です。その季節の代わり目の微妙な水の変化を、我々は感じ取ることを誇りとしていたと思います。日本人としては、当たり前の事だったのかもしれませんが、それが、明治以降の近代化の過程で、我々は欧米技術に大いに学びました。あるいは、行政組織も教えて頂きました。それによって、我々は大変進歩したのですが、しかし失われたものも多かっただろうと思います。その失われた物の中に水に対する鋭敏な感覚が、少し麻痺したのではないかと感じます。

川への鋭い感覚を取り戻すことが求められている

次に、河川技術、特に日本の治水技術について触れたいと思います。江戸時代までの日本の治水技術は、激しい洪水を完全に技術の力でコントロールすることができないという前提に立ち、いかに洪水とうまく付き合うか、あるいは洪水という自然の猛威とどのように付き合うか、どのようになだめすかして付き合うかを基本としていました。

例えば、洪水を完全にコントロールできないという前提なので、徹底的な重点主義が行われました。

例を挙げると、尾張藩は徳川御三家なので、治水上どうしても守らなければなりません。したがって、木曾川の堤防は、尾張藩の対岸は3尺以上低くしなければいけません。俗に「尾張三尺」と呼ばれる治水法です。どこでも同じように守ることはできないので、どこかに重点を置くということです。

あるいは、武田信玄の治水が評価されていますが、あれは甲府という町を守ることを大前提として信玄堤を築き、その対岸はほとんど無視してきたわけです。これも徹底的な重点主義です。

あるいは、洪水をいかに上手くなだめすかすかということを考えたり、治水は川だけでは対応できないので、氾濫しそうな場所をどう利用するか。また、いわゆる洪水によく遭う地域には住まない、あるいは、水に浸かっても抵抗できるような作物を植えるなど、さまざまな方法で多面的に治水に対応してきたことが、江戸時代末期までの日本の治水です。

明治以後、日本は鎖国の間に進歩していた科学技術を全面的に取り入れました。それは、明治の人間にとっては、まばゆいばかりの素晴らしい技術でした。そしてそれを駆使し、1897年から1930年頃まで、活発な治水事業を行いました。それは相当成功したのですが、洪水を完全にコントロールすることができなかったのです。自然は、そんなに生易しいものではなかったわけです。ところが、

明治以後の近代化は素晴らしいもので、世界を驚かし、また第二次世界大戦後の高度成長期も素晴らしいものでしたが、その結果、技術者も一般市民も技術を過信しすぎたのではないかと思います。そこで我々は、その段階において、元来自然と見事に付き合っていた治水技術の考え方も導入し、これからの時代に対応するべきではないかと思えます。また、人々もとかく治水事業が発展するにつれて、一般市民も行政任せ、技術任せの風潮を生んだといえます。

これから大きな転換期を迎えたわが国では、技術は決して万能ではなく、治水は単にハードな技術だけでまっとうできるものではないという限界をよく知り、失われそうになっている日本人の優れた自然観、あるいは河川についての考えを呼び起こし、この転換期にあたって新たな治水戦略、あるいは水の利用の建て直し、そして、行政任せではなく水感覚を復活させると共に、一般の民衆と行政の協調を支える技術が必要な段階であると思えます。

幸いにして、1997年の河川法改正において地元住民の意向を考慮する必要に迫られ、全国で、流域委員会によりいろいろな代表を交えて議論が行われていること自体は、大いにあるべき方向です。しかし、その時に日本人が持っている川についての鋭い感覚をどう取り戻すか、これは民衆の方のみならず河川技術者にも強く問われている問題だと思えます。

コルバンさんのお話を伺い、我々は水の管理のみならず、水の感性、あるいはコルバンさんが触れられた水についての感性を、日本人の特性に基づいてどう復元するかが、これからの日本の治水なり、水事業にとって重要であることをつくづく感じた次第です。